

後腹膜腫瘍

後腹膜腫瘍について

後腹膜腔に発生する腫瘍を後腹膜腫瘍といいます。国内における後腹膜腔に発生する肉腫は年間10万人あたり0.5-1人に発生しており、厚生労働省の定義する希少がんです。肉腫は身体の表面を構成する細胞から発生するのではなく、筋肉・神経・脂肪組織細胞（間質細胞）から発生する悪性腫瘍（骨・軟部腫瘍疾患として扱われることが多い）です。また後腹膜腔は前方を腹膜および腸間膜、後方を大血管や脊椎・筋肉などで囲まれており、後腹膜に発生した腫瘍は上述した組織に浸潤する可能性があることが知られています。また後腹膜腫瘍細胞の顔つき（組織型）は約120種類を超えます。以下に後腹膜に発生する代表的な2種類の組織型について概説します。

脂肪肉腫

ここでは体幹後腹膜に発生する脂肪肉腫の中で発見頻度の高い高分化型および脱分化型脂肪肉腫について説明します。

高分化型脂肪肉腫

● 診断的特徴

- ・腫瘍は通常の脂肪組織に類似した成熟脂肪細胞から構成されています。

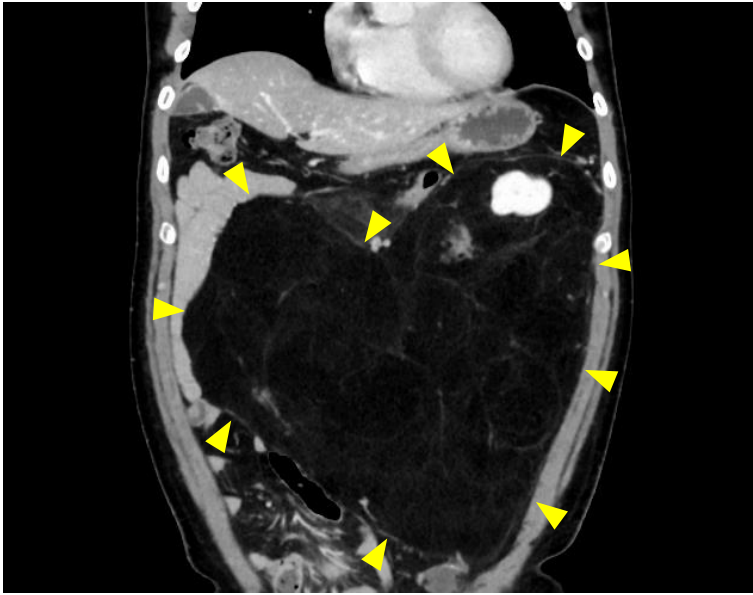
● 臨床的特徴

- ・腫瘍の増殖は比較的穏やかです。
- ・脱分化型脂肪肉腫と比較して予後が良好です。
- ・局所再発の可能性はありますが、遠隔転移は比較的まれです。

● 治療方針と注意点

- ・標準治療は手術による完全切除です。
- ・周囲臓器を可能な限り温存手術を行います。
- ・腫瘍の一部が脱分化型に転化する可能性があり、その場合は悪性度が上昇します。

図1 左下腹部に発生した高分化型脂肪肉腫



脱分化型脂肪肉腫

● 診断的特徴

- ・ 脱分化型脂肪肉腫は高分化型脂肪肉腫から発生し、より悪性度の高い腫瘍に転化したものもあります。
- ・ 画像診断上の特徴として、高分化型成分と脱分化型成分が混在して見られます。

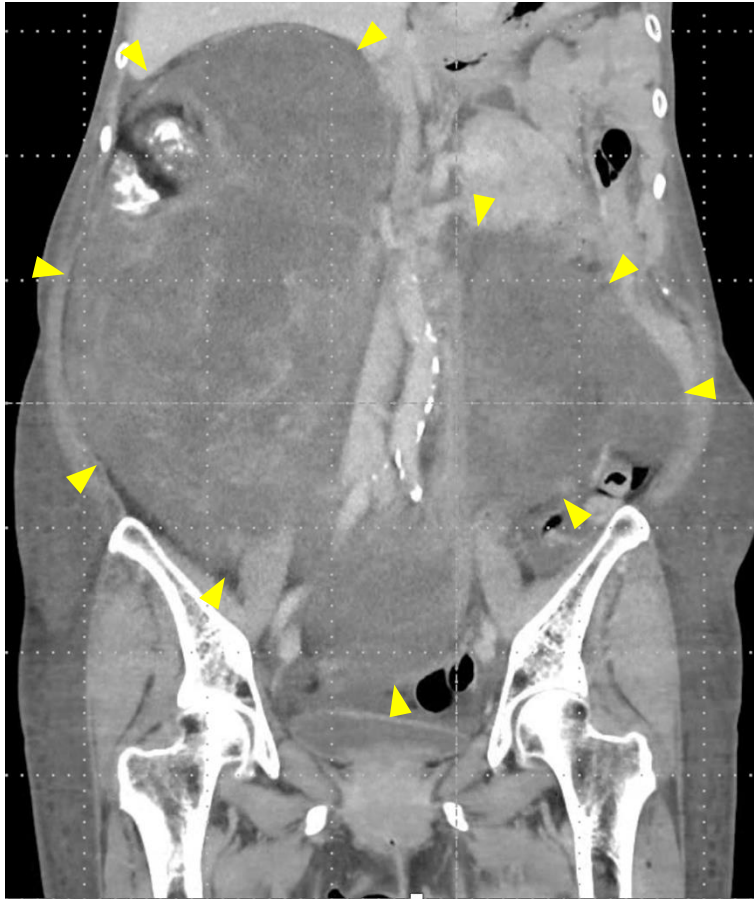
● 臨床的特徴

- ・ 腫瘍の増大速度が速く、進行が早いことが特徴です。
- ・ 高分化型脂肪肉腫と比較して予後が悪く、局所再発や遠隔転移のリスクが高くなります。

● 治療方針と注意点

- ・ 手術による完全切除（R0切除）が最も重要な治療となります。
- ・ 周囲の臓器への浸潤傾向が強いため、多くの場合で周囲臓器の合併切除が必要となることが多いです。
- ・ 化学療法が腫瘍の悪性度を低下させることもあり、症例によっては術前化学療法を行うこともあります。

図2 脱分化型脂肪肉腫



平滑筋肉腫

● 診断的特徴

・平滑筋組織から発生する悪性腫瘍で、主に後腹膜、子宮、消化管などに発生します。

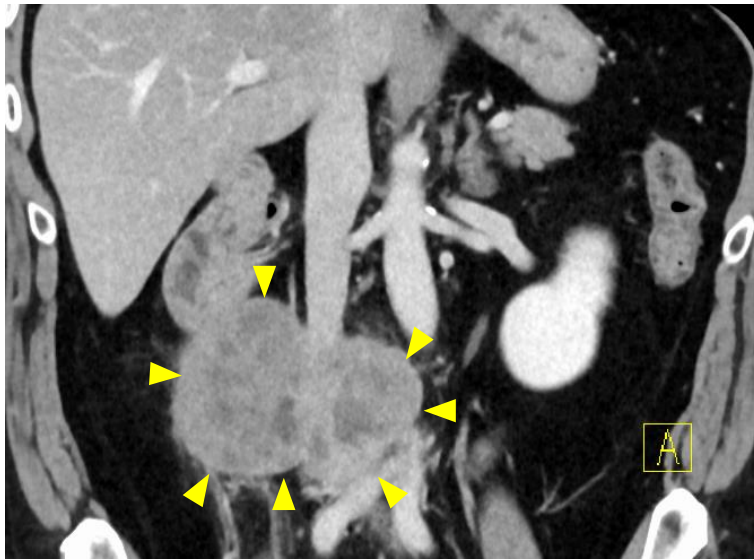
● 臨床的特徴

- ・進行が比較的早く、局所浸潤性が高い傾向があります。
- ・血管との関連が強く、特に大静脈系由来のことが多いです。
- ・血行性転移をきたしやすく、特に肺転移が多く見られます。

● 治療方針と注意点

- ・手術による完全切除（R0切除）が最も重要な治療となります。
- ・血管の切除と再建が必要となる場合があり、心臓血管外科との連携が必要なことがあります。
- ・化学療法や放射線療法への感受性は比較的低いですが、症例によっては術前術後補助療法として検討されることもあります。

図3 下大静脈に発生した平滑筋肉腫



症状について

- ・初期（腫瘍が小さいとき）
 - ・自覚症状はほとんどありません。
 - ・健康診断や他の検査で偶然発見されることが多いです。
- ・進行期（腫瘍が大きいとき）
 - ・お腹に腫瘤（できもの）を触れます。
 - ・腹部のはり感を自覚することがあります。

診断について

後腹膜肉腫の診断は、以下の大きな2つの柱で行われます。

●画像検査による診断

・CT/MRI：腫瘍の性質および隣接臓器への浸潤の有無などに有用です。

・PET：腫瘍が他の場所に広がっていないかの確認と共に、腫瘍の活動性を確認します。

●生検による確定（組織）診断

- ・細い針で組織を採取します。
- ・腫瘍の種類と悪性度を特定します。
- ・結果により治療方針を決める重要な判断材料となります。

治療について

手術療法が最も効果的な治療法です。手術療法が困難な場合に限り、抗がん剤治療（化学療法）や放射線療法を検討しますが、これらの治療効果は限定的です。

1. 腫瘍の種類（組織型）によって手術療法が異なります。
 - ・高分化型脂肪肉腫：周囲臓器をできるだけ温存する手術を行います。
 - ・脱分化型脂肪肉腫：周囲臓器の合併切除が必要な場合もあります。
 - ・平滑筋肉腫：血管の合併切除だけでなく、血行再建が必要な場合がある。
2. 手術の特徴
 - ・複数の診療科（心臓血管外科、骨盤外科、産婦人科、整形外科、泌尿器科など）と連携手術を行います。
 - ・患者さんの状態に応じた手術療法の選択を常に検討しています。
3. 再発した場合の対応
 - ・手術が有効と判断されると判断される場合は積極的に実施します。
 - ・多発転移あるいは遠隔転移を認める場合：
 - ・院内カンファレンスで治療方針を検討します
 - ・腫瘍内科医や放射線科医と協議を行います。
 - ・臨床試験や治験を含む最適な治療計画を立案しています。

このように後腹膜肉腫の治療は、患者さん一人一人の状況に合わせて最も適切な方法を選択します。多職種横断的に慎重に検討し、最善の治療を提供することを心がけています。

執筆者

- 氏名： 砂川 真輝
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 消化器・腫瘍外科（肝胆膵）